小金井けやきの森認定こども園（学校法人村田学園）小金井市

■ 基本情報

所在地	東京都小金井市緑町1-6-17
運営主体／種類	学校法人 村田学園／幼保連携型認定こども園
施設規模	●幼稚園部：39人　●保育園部：81人
特色・理念・目標など	園は小さな子供が集まる集団生活（社会生活）の場。“お友だちを大切にすること” “自分がされたら嫌なことはお友だちにもしないこと” などの大人にも通じる基本的なことを日々の園生活を通してゆっくりと無理なく身につけさせ、社会性のあるステキな大人になれるよう保育サポートを行う。
園の周辺環境	●第1園庭、第２園庭と2つの園庭をもち、野菜の栽培や果樹、花などさまざまな植物の栽培も行っている。
取組クラス	5歳児クラスを対象に活動を実施

■ 事前打ち合わせ・導入研修での様子

事前打ち合わせでは、「子供主体の保育」をどのように取り組んでいくか、「個の保育」をどう理解したら良いのかという戸惑いを感じている様子がみられた。また、園庭には果樹があり、季節の花が咲いているように手入れをし、畑で野菜を育てているという取り組みを行っているため、園庭を活用したいという意向があった。

導入研修では、参加クラスの保育者がまずはやってみようという気持ちになり、様々なアイディアが挙がり、前向きに取り組もうという姿勢が見られ、参加クラスの取り組みを園全体に広げていきたいということだった。

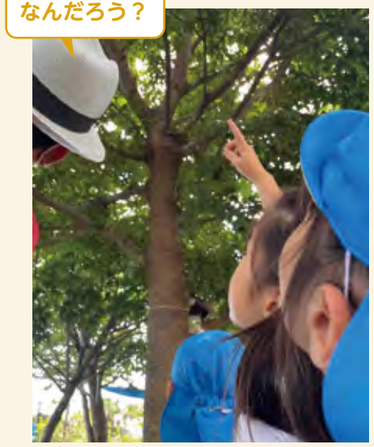
季節の野菜も育てている第2園庭

導入研修

活動同行1回目

2022年8月19日 10:30-11:40［第１園庭・第2園庭］

なんだろう？



サルが食べたんじゃない？

自然豊かな園庭に出ると、子供たちの興味を惹く自然物がたくさん。木の上の方にとまっていたセミを見つけて、「どこどこ？」「あそこにいるよ！」と教えあったり、「あれはなんだろう？」と何かのサナギのようなものを見つけて、保育者も一緒に「なんだろうね～」「ふしぎだね」と興味を持ってみていた姿が印象的だった。

きゃ～触りたくない～

あっちだ！

「なんだこれ～？」と1人の子供が見つけたコガネムシに集まってきた子供たち。持ってみせると「きゃー」と逃げていく子供たち。チョウをバケツで捕まえようと奮闘する子供たちの姿もあり、捕まえたいけど素手では触りたくない‥という姿が印象的だった。

保育者が感じた子供たちの様子

久しぶりに園庭で遊ぶことができたので、虫や植物に触れる時間を長く作りたいと考え、第１、第２どちらの園庭で遊ぶかを選べるようにした。虫を追いかける姿や、遊具で遊ぶ時にものびのびとしていたと思う。

園庭に落ちていた木の実に小さなアリが集まっている様子を見つけ、巣に運んでいくのか、何をしているところなのかなど興味を深めていた。木に止まっているセミを見つけた時には、セミのいる木といない木の違いを考えている様子があった。

アドバイザーからの振り返りのポイント

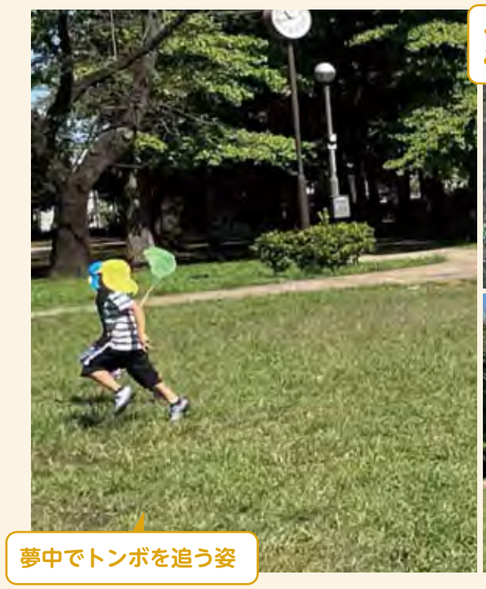
- 虫の名前や知識を全て教えてあげるよりも、子供たちが知りたいと思った時に、一緒に調べたりできれば良い。知識よりも体験を増やしていくことが幼児期には必要。またバケツで捕まえるよりも虫あみの方が捕まえやすいし観察しやすい。次に繋げる投げかけとして、「どうしたら捕まえられるか」を投げかけてみるのも良いかもしれない。
- 子供たちが体験したことを最後に振り返ることで、他の子が遊んでいて発見したこと・面白かったことなども共有できる。活動の終わりに振り返りをしてみてはどうか。

活動同行2回目

2022年9月28日 10:00-11:45［小金井市梶野公園］

公園に着き、入り口付近に水筒や荷物を置くと、思い思いに遊びたい場所へと散らばる。トンボやチョウ・バッタを夢中で追いかける5～6人の集団や木馬を乗りに行ったり、木の実を探しに行ったり、木登りをしたりと広い公園を目一杯使って遊びを繰り広げていた。子供らしいのびのびとした姿が印象的だった。
最後に公園で、初めて振り返りの時間をもつと、全体では難しかったものの、子供同士で見つけたものを見せ合う姿がみられた。

久しぶりの園外への散歩で、駅前のお店屋さんの前を通ると、子供たちが興奮状態になりながら歩き、先生方は誘導に苦労していた。



保育者が感じた子供たちの様子

公園への移動で駅前を通った時に、新しいお店ができ風景が変わっていたので、いろいろなところに子供たちの興味が向いて賑やかになりすぎた。

公園では、小さなリンゴの実がなる木の様子に、園庭にあるリンゴの木との違いを感じていた。トンボを追いかけていた子供たちは、園庭ではトンボが高い位置に止まってしまうが、公園では木の高さが低く止まる位置が子供たちにもちょうど良くトンボを捕まえることに熱中していた。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- お店屋さんの前を通る時、子供自身で気をつけようと考えられるよう意識づけをすると良い。自分で判断できるような問いかけ等を。
- 夢中で虫を追っていたり木の実を探したり、のびのびと過ごしている子供らしい姿を大切にしながら、安全管理も同時に行う視点や方法。例：拠点を安全管理が必須の木登りの場所近くに設定する、子供をグループで分けて保育者の見える範囲で過ごす等
- 子供たちとの振り返りを初めて行ってみて、小さなグループでは自発的に拾ったものや捕まえた虫を見せ合っている姿があったため、継続する大切さを伝えた。

活動同行3回目

2022年10月26日 10:00-11:45［小金井市梶野公園］

前回、広がりすぎてしまった点を改善し、他の園が運動会の練習をしていたこともあり、チーム分けをして活動を行った。虫取りチーム、木登りチーム、秋探しチームに分かれた。最初に入ったチームから別のチームに移動したり、木登りを待つ間に秋探しチームに入ったりと各保育者の近くで緩やかにまとまって遊ぶ姿が見られた。
木の実を探していたが、あまり木の実は見つからず、前回来た時との違いを感じた様子。落ち葉を拾い集めたり、葉っぱの状態を見て「これは冬だ」と秋から冬への移り変わりを感じていた様子もあった。
虫好きな子供たちはバッタがいなくて残念そうにする一方でトンボをみんなで追い込んで捕まえる姿も見られた。
初回で虫に触れられなかったがみんな自分で捕まえるようになっていた姿が印象的だった。

保育者が感じた子供たちの様子

前回は自由に遊ばせることを目的としたため、広がりすぎて全体を見きれない部分があったため、今回はグループに分けて活動した。

木登りグループでは、みんなで一斉に登ってしまうと、降りるときに降りられなくなってしまうので、順番に登ろうという声が子供たちから挙がった。高く登ることができたことで達成感を感じている様子もあった。上まで登った子からは、上の方は枝が細くなっていることや、葉のチクチクするトゲのことなどに注意するよう友達に話す様子もあった。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 今回はチームで分けたため、安全管理がしやすかった。チーム間を行き来しながら遊んでいたので、ある程度自由さもあった。子供たちの興味や姿を見て、柔軟な対応ができていたことがよかった。
- 木登りの安全管理について、あまり高いところまで登って先生自身が見ていて不安な時は、声をかけて「そこまでにしておいて」等、声を掛けても良い。また、同時に数人の子供が登ると安全を保ちにくいこともあるため、登る木を選んでも良い。時期や年齢などによって、対応を変えるとリスクが伴う活動も安全にできる。

活動を振り返る

同行1回目

虫に興味はあるが触れない

虫とり網や虫かごなどを用意しても良いのでは？網で捕まえて虫かごに移す際に思わず触れてしまうという姿が出てくることがある。虫も観察しやすいので用意してはどうか？

どうして砂がキラキラしている？子供たちが不思議に思う様子

知識を教えるという関わりになっていた。子供たちもわからないと大人に聞きに行ったり、何かをする時に大人に聞くという姿が多かった。一方で、子供たちからはユニークな呟きが聞こえてきた。

保育者から
- 久しぶりの園庭であったため、長めの時間を確保することを心がけた。
- 虫や野菜に触れられるように、子供たちが第１園庭と第２園庭を選べる環境を提供し、それぞれに好きな遊びで過ごせることを意識した。
- 子供たちの興味をそばで見ることができるよう一緒にいることを意識し、興味を引き出せるよう心がけた。

同行2回目

興奮状態の子供たち

久しぶりの園外への散歩で、駅前のお店屋さんの前を通ると、子供たちが興奮状態になり、先生方は誘導に苦労していた。

トンボやチョウ・バッタを夢中で追いかける

水筒や荷物を置くと、思い思いに遊びたい場所へと散らばる。トンボやチョウ・バッタを夢中で追いかけ、木の実を探しに行ったり、木登りをしたりと広い公園を目一杯使って遊びを繰り広げていた。

保育者から
- 駅周辺が変化し移動中の匂いや風景に、子供たちが高揚気味で、賑やかになりすぎた。
- 特に遊具の無い公園のため、虫や木の実、木のぼりなどある環境の中で工夫して遊んでいた。
- 園庭から外に出たことで、子供たちからの疑問や問いかけに広がりを感じた。

同行3回目

子供たちをチーム分け

「虫探し」「秋探し」「木登り」と、子供たちの興味に合わせてあらかじめチーム分けを行ったことで、混雑した公園でも安全管理がしやすかった。

木登りの安全管理

あまり高いところまで登って先生自身が見ていて不安な時は、「そこまでにしておいて」等、声を掛けても良い。また、同時に数人の子供が登ると安全が保ちにくいこともあるため、登る木を選ぶことや、時期や年齢などによって対応を変えると安全に活動できる。

保育者から
- 木登りグループでは、上に行きすぎないよう、下から声を掛け合う姿が見られた。
- 木の実探しグループでは、落ち葉の色で季節を感じている様子がおもしろかった。

活動のまとめ

担当アドバイザーより取り組みの特徴と意図

▶担当：野村直子

- 外遊びや散歩での実践による「子供主体の保育」の検討
- 安全管理のさじ加減
- 見通しをもつ動機付けと振り返り

▶活動を通しての子供と保育者の変化

- 園内にも豊かな自然があり、自然好きな職員がいて、素晴らしい環境を持っているが、危険な虫には触っていけないという安全管理の意識が強く子供たちに伝わっており、子供たちが自ら虫に触れてみようという姿がなかなか出て来なかった。しかし、虫に興味を持つ子供たちが自ら捕まえてみたいという、直接的な体験ができるようになった。保育者もある程度見守りながら安全管理ができるようになった。
- 今回の保育の振り返りを通して、担任同士で次はこうしよう、あぁやってみようという会話が増えたようだった。積極的に子供との関わりを改善していく保育者の姿が見られた。
- 子供主体の保育は、今までの保育を変えなければと思っていたようだったが、今回自然環境で保育をすることで、子供たちの考えを引き出し、一緒に考えながら進めることが伝わった様子だった。
  また子供主体が、“ただ、のびのび自由に”ということではないことも知ってもらえたようだ。

アドバイザー総括

自然豊かな環境の中で育っている子供たちはのびのびと子供らしく育っているように感じました。先生方は、行事や計画を進めることと子供主体の保育が結びついていない様子で、今回のアドバイザー派遣にも戸惑いが見られました。しかし、「子供たちに様々な体験をさせてあげたい」という思いを持っていることも伝わってきましたので、今回は、うまく計画と自然の中での子供たちの発見や気づきを繋ぎ合わせることで、子供たちが主体的に取り組む保育へと少しずつ変化できたらと思いながら関わりました。子供たちとの対話を通して、持ち帰った自然物を展覧会に使おうか、虫を捕まえるには何が必要か、など日常の保育と外遊びをうまく繋ぎ合わせる取り組みが始まりました。のびのびとした子供らしい姿を大切にしながら、保育計画や行事を考えていけると先生方ももっと気持ちが楽になるのではないかと思います。

同じように悩み・戸惑っている園もあると思いますので、こちらの園の取り組みは参考になるのではないかと思います。

一の橋赤ちゃんの家（社会福祉法人純生喜狛会）狛江市

■ 基本情報

所在地	東京都狛江市駒井町1-15-32
運営主体／種類	社会福祉法人 純生喜狛会／小規模保育事業
施設規模	●0歳児：2人　●1歳児：8人　●2歳児：9人
特色・理念・目標など	小規模だからこそできる家庭的な保育を行い、年齢に応じてできることを工夫し保育に取り入れている。 園庭がないため公園などでの園外保育を行い、子供たちが季節の移り変わりを感じられるような声掛けをし、豊かな心を育む保育を目指している。
園の周辺環境	●近隣周辺に畑が多く、静かな住宅街に立地 ●近園外保育では、団地の中の公園を利用するほか、園から徒歩15分ほどのところに多摩川があり、広々とした河川敷が広がる。
取組クラス	1・2歳児クラスを対象に活動を実施

■ 事前打ち合わせ・導入研修での様子

保育の安定を一番に望んでいる様子であった。今回は1～2歳児を保育同行日の時に合同で行い、学びを深めたいという意向があった。保育者の経験の差が懸念の様子だったが、本事業を通して具体的に保育について学びたいと、意欲的だった。近隣環境を活かし、散歩活動を多く取り入れており、すでに積極的に自然を保育に取り入れていこうとしていた。取り組んでいく上での、安全管理や年齢ごとの活動の方法等を知りたいという声が挙がっていた。

導入研修

農地が点在する周辺環境

どんぐりが一面に散らばる駒井・上村中ひだまり児童公園

活動同行1回目

2022年9月27日 9:45-11:30［喜多見団地広場］

なにかなってるね～

遊具に集まる姿

道中の畑の野菜や果物を見ながら楽しく歩くことができていた。子供の足で30分ほどの公園まで行き、1歳児がよく歩いていたのが印象的だった。目的の公園は混んでいた為、グラウンドのような公園へ。保育者が真ん中に砂場道具をたくさん出し、ほとんどの子供たちがその遊具で遊び始めた。

いらっしゃいませ～

自然に遊びが始まる

公園の周りの植え込みに生えていたネコジャラシで遊ぶ子供たちをきっかけに、自然物でのお店屋さんごっこやおままごとの遊びが、アドバイザーを介して始まった。2歳児の子と先生が以前来た時に隠した木の実を探し始めたことがきっかけに他の遊びへと広がった。

保育者が感じた子供たちの様子

季節によって畑の野菜の様子や、虫、草花も変わっているので、そうしたことを話しながら歩くことができればいいと思っていた。

砂場道具で遊んでいる時に、容器に葉っぱや砂を入れ、木の枝を泡立て器に見立ててぐるぐるとかき混ぜている姿が、初めて見せた遊びだったので印象に残った。地面に木の枝や石でお絵描きを始めた子がいて、2歳児になるとマンガの特徴をよく捉えられるようになってきたと感じる。

以前来た時に、葉っぱに木の実をくるみ隠して帰ったことをよく覚えていて、今日は隠した木の実を探すことから遊びが始まった。その後はまた同じように、木の実を隠していた。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- おしゃべりを楽しみながらよく歩いている姿だった。ただ遠い場所まで行ったため、自由に遊ぶ時間が短く感じた。もう少し手前の公園にして、遊ぶ時間を確保してはどうか。
- 遊びが始まる前に、砂場道具を真ん中に出したため、ほとんど全員がそれで遊び始める様子だった。子供たちの様子を見てタイミングを見計らってから遊具を出したり、自分で出せるように設置するなどの工夫をしても良かったのでは。

活動同行2回目

2022年11月9日 9:45-11:30［多摩川河川敷］

階段で１人ずつ介助

草の穂で遊ぶ姿

遊歩道から河川敷に降りていく階段で、保育者が1人ずつ後ろ向きにして降ろしていた。子供自身で降りていける場所を選んだり、保育者同士が連携するとよりスムーズに。遊具などがなくても、枯れ草で小山になっているところを上り下りしたり、草の穂で遊んだり、子供たちが自ら遊びを見つけて遊び始める姿があった。

ハッピバースデー♪

うんとこしょ
どっこいしょ

大人が始めた遊びを介して、見立て遊びが始まる。モグラの穴の土に小枝をさしてお誕生日ごっこ。子供たちも「ハッピバースデー」の歌を口ずさむ姿。ススキの穂を取ろうと「うんとこしょ・どっこいしょ」が始まり、友だちとの遊びを楽しむ2歳児の姿が印象的だった。

保育者が感じた子供たちの様子

多摩川はほかの公園にくらべ行く機会は少ないが、どこに何があるということをよく覚えていると感じた。電車が見えたり広々としているので、子供たちも解放感がありのびのびしている雰囲気を感じた。

河川敷の広い芝生の広場で、自分たちがどう遊ぼうかと考えている様子だった。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 全員が同じように降りるのではなく、個々の成長発達に合わせた臨機応変な関わりを心がけ、介入のタイミングや仕方を変えるとよい。しっかり歩けているからこそ、段階的に自分で降りられるようなポイント作りを。2歳児はお尻滑りができるような場所で降りて、会う場所を決めておくなど別行動の動きを作っては？
- 保育者が子供の遊びをひいて見ていることが多いため、全体を見る人、子供と遊ぶ人と役割を明確にすると、より子供との距離が近くなり、遊びに入り込んでいけるようになる。

活動同行3回目

2022年11月16日 9:45-11:30［駒井・上村中ひだまり児童公園］

どんぐり拾いに夢中

いらっしゃいませ～

今まで衛生面の不安から遊びに行くことを避けていた一番身近な近隣の公園にて活動。たっぷり時間をとって遊ぶことができ、子供たちがよく遊び込めていた姿が印象的だった。どんぐりがたくさん落ちていたこともあり、子供たちは夢中でどんぐりを拾い、そこからごっこ遊びが始まり、石などでお店屋さんごっこが始まったりと、遊具がなくても遊び込んでいた。保育者も一緒に楽しむことで、子供たちも落ち着いてじっくりと遊ぶことができていた。

植え込みの裏での遊び

乳児の安全管理は
配置がポイント

これまでは行かせていなかった植え込みの後ろに入ったが、危ない様子もなく子供たちは行き来を楽しんでいた。保育者も入ってみて、実際にどこが危ないのかを確認することが大切。また安全管理がしにくい場所で、今まではあまり遊ばせていなかった場所だったが、ポイントで人を配置し、安全に活動ができた。

保育者が感じた子供たちの様子

最近、2歳児が見立て遊びをできるようになり、たくさん落ちていたドングリや石を使って見立て遊びを楽しそうに行っていた。子供たちのその様子が楽しそうだったので、自分も楽しくなった。

以前は遊具の周りだけで遊んだが、今日は男の子たちが木立の茂みで探検ごっこやかくれんぼを始め、目をキラキラさせていた。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 安全管理の配置について、目が届かなくなるような行ってほしくないところのポイントに誰か1人が立っていれば、他の保育者は目の前の子供をしっかりとみることができる。
- 保育者が動き回るよりも、ある程度１箇所に留まり他の保育者と声を掛け合いながら子供たちを見ていく事で、子供の姿が捉えやすくなる。
- 何よりも今日の活動が楽しかったというその感想が出たことが大切。先生が楽しかった保育は子供たちも楽しかったことは間違いない。

活動を振り返る

同行1回目

おもちゃの出し方の工夫
砂場道具を真ん中に出したため、ほとんど全員がそれで遊び始める様子だった。

「何をしたら楽しむ？」
ネコジャラシで遊ぶ子供たちをきっかけに、お店屋さんごっこやおままごとがアドバイザーを介して始まった。

保育者から
- 季節の変わり目で、周りの風景を見て話をしながら歩くために、歩く距離を長くした。
- 地面に絵を描くことで、画用紙の紙の大きさに縛られずのびのびと描いていたのが印象的。

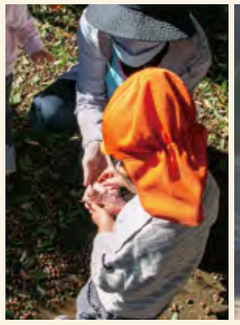
同行2回目

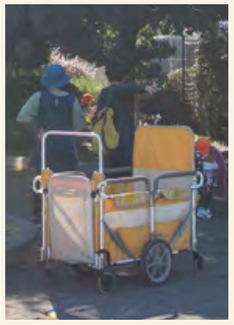
階段で１人ずつ介助
河川敷に降りていく階段で、保育者が1人ずつ後ろ向きにして降ろす。

友だちと協力しながら遊ぶ子供たち
友だちとの遊びを楽しむ2歳児の姿。子供同士で遊びを展開し、それが他の子へも派生していく。

保育者から
- 広い河川敷で、おもちゃなどを使わず自然の中で工夫して遊びを見つけ出していた。
- 保護者による保育参加の日。幾分、気を使う部分があった。

同行3回目





保育者も楽しむ
どんぐりがたくさん落ちていたこともあり、子供たちも保育者も夢中でどんぐりを拾う。

ポイントを押さえた安全管理
全体を見る人、子供と遊ぶ人、役割を明確に。ポイントを押さえて安全管理。危ないと思える場所も、保育者自身が行ってみることで、危なくなかったということもある。禁止していた植え込みの後ろも、危ない様子もなく子供たちは行き来を楽しんでいた。

保育者から
- 公園内を動き回る子供たちを安全に管理することが難しい。
- ひだまり公園は、ゴミが散らばっていることが多い印象があり、これまで使用を避けてきた。

活動のまとめ

担当アドバイザーより取り組みの特徴と意図

▶担当：野村直子

- 保育者間の連携による保育の実践
- 子供の遊ぶ力を信じ保育者自身も楽しむ保育を実践し自信をつける
- 一番近い公園の活用を検討し、安全管理を一緒に考えていくこと

▶活動を通して見られた変化や効果

- 自信なさそうにしていた保育者たちの表情がどんどん変化していった。特に３回目には振り返りの言葉に自信がのっていた。
- 一番活用しやすそうな公園の活用ができるようになった。
- 「子供をどう遊ばせよう」という意識から「どう遊んでいたか」を保育者が楽しそうに共有できるようになった。
- 保育者同士で立ち位置を考え、役割分担することで、子供たちの姿をより捉えられるようになったことを実感できていた。
- 子供たちの自発的な遊びや自ら遊びを見つけて遊び込む姿が見られるようになった。
- １回目よりも、子供たちの自由な発想や遊びが広がる姿が見られた。

アドバイザー総括

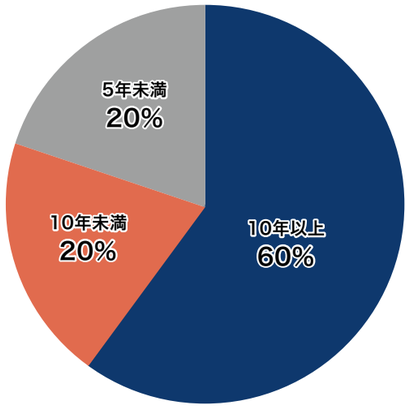
自然の中で過ごす時、乳児は感覚的に自然と関わりながら遊びます。乳児期の場合、保育者が“子供主体の保育をしよう”と頑張らなくても、子供が見ているものを一緒に見て、子供が何に耳を澄まし、どんな感触を楽しんでいるのか、子供の姿を捉えることで、自ずと子供が主体的になる保育活動になると思います。「どう遊ばせようか」と色々と考え、砂場道具やままごと道具を持って出かけていく園も多いのではないでしょうか。しかし、大人が用意した遊びで遊ばせるよりも、子供たちが自ら作り出す遊びの方が長続きし、遊び込むという姿がみられます。今回は、保育者がそれを体験したのではないかと思います。「自分が楽しめていなかった」とこの事業を通して気づいた先生がいらっしゃいました。子供たちと「どう遊ぼうかな」という視点に変わることで、先生自身も楽しめるようになります。

本当に子供たちがよく歩いていて、上手に楽しくお散歩をすることができています。道草や地域環境を生かし、子供たちも野菜や果樹を見つけては指さしたり、名前を言ったりと、道中を楽しんでいる姿が印象的でした。「きちんと歩かせる」ことに偏りがちなお散歩ですが、この園のように保育者も「畑のおじさんお仕事してるね～」と子供と会話し、時には近隣の方との交流の機会もあり、笑顔で楽しくお散歩をする姿は参考になると思いました。

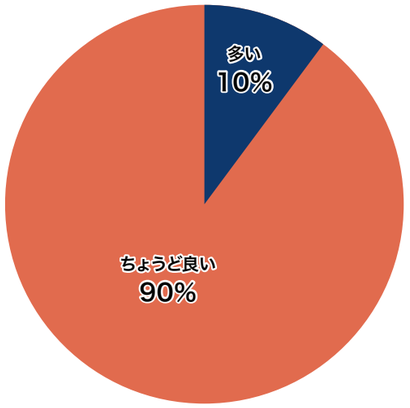
Ⅲ 参加園における取組

参加園アンケート ●アンケート回答数：11名

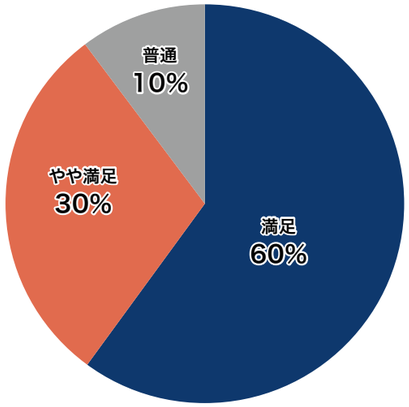
1. 保育者としての就業年数はどのくらいですか。
（通算就業年数（他施設での就業年数を含む））



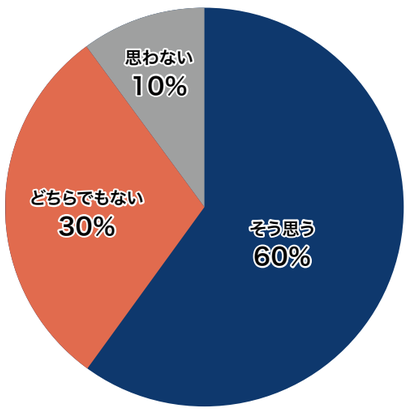
2. アドバイザー派遣の実施回数はどうでしたか。
（活動同行 3回）



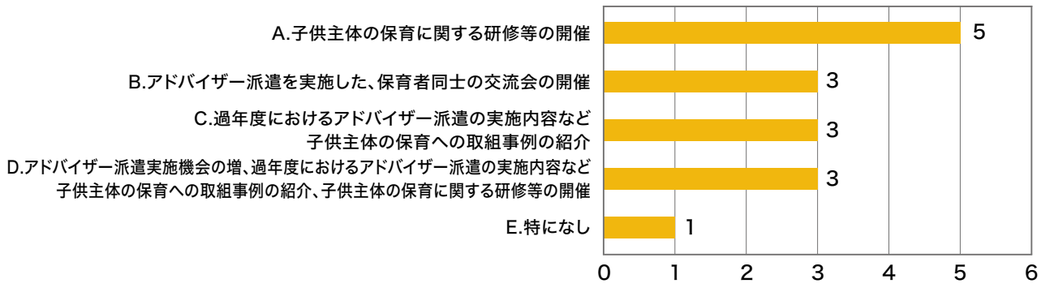
3. アドバイザー派遣事業に参加した満足度はどのくらいですか。



4. また、機会があればアドバイザー派遣事業に参加したいと思いますか。



5. 本事業に関して行政へ要望すること（※複数回答）



参加園アンケート〈自由記述〉

6. アドバイザー派遣参加前は、「子供主体の保育」について、どのように意識していましたか。

- 主体性がどのような事か分からず、手探り状態で保育をしていた。
- 子供たちの自主性を大事にすることかなと思っていました。

7. アドバイザーからの助言を受けて保育者自身や保育園が変化した、変化しなかったと感じた点。

- 子供と共に夢中になって遊ぶことの大切さを改めて考えさせられた。
- 他の保育者に主体的な保育について発信できるようになった。
- 今までは散歩先で自分が子供たちの元へ動いていたのですが、自分の位置を決めて遊ぶことにより自然に子供たちが寄ってきて遊びを広げていくようになりました。
- 変化した点：遊びの中で子供に呼ばれたらすぐに駆けつけていたが、その場で話を聞き援助をする事を学び、目の前の子供たちに向き合えるようになった。
  変化しなかった点：理解はしているが、まだ動いてしまう。

8. アドバイザー派遣を終え、子供たちの変化について

- 枯葉で山を作る、木の実の中身を出して発見するなど公園では自然を使って遊ぶ機会が圧倒的に増えた。
- 自然に興味を持たなかった子供が興味を示すようになり、慣れ親しんだ公園での遊びが広がった。
- 行事開催に際し、テーマや内容について、子供たちの意見を重視することで、やり切ることが少しずつだが出来るようになったように感じる。また、いくつかの選択肢から自ら選ぶということをしていくなかで、自分で決めたといった意識も育っているように感じる。
- 自分自身でいろんなものをみつけて遊びに広げているように感じます。
- こちら側の話しかけかたを変えると、子供たちも、本当に気持ちを伝えやすくなると思います。

9. 子供主体の保育を今後進めていく上で感じている、難しさや工夫が必要な点について

- 保育者不足の中で、散歩に行けなかったり見きれないことからだめだと言わざるを得ない場面がある。
- 子供の安全を守り何処までを許すのかの基準等
- 安全面を優先しながら、保育者が共通認識を持って保育を行うこと。
- 怪我をさせるなと言われているのに子供主体にすると怪我がつきものになること。
- 全て主体にしてしまうとどうしても難しいと思ったりします。どこまで主体にするかを職員同士よく話し合いが必要だと思います。
- 上からの目線にならない。子供たちが安心して気持ちを伝えられる、そういう存在にならなければと思いました。